第13回 物語・小説(5)

主題②

（出典　後藤竜二「天使で大地はいっぱいだ」〈講談社〉より）

［46ページ］

問一　くじびきは、「キリコもふくめた六年三組の全員五十六名が、おたがいに、おくりものをしあう」（27・28行め）と、「ホームルームで話しあってきめたこと」（26行め）であると、みんなでたしかめています。

問二　「わたしはとってもきれいに作ったのに、こんなみっともない表紙のがあたって、そんしちゃいました」（9・10行め）と、デッコは先生にうったえます。自分はがんばってきれいに作ったという思いがあるからこそ、みっともない絵の歌集があたって「そん」をしたと感じているのですね。

問三　くじびきをしたのは、みんなが「おたがいに、おくりものをしあう」（28行行め）ためでした。「ひとりひとりが、だれのものになるかわからないけど、心をこめて作った」（30・31行め）のだと思い出してもらうことで、あたって「そん」をしたと思うようなみっともない絵の歌集はないのだということを、先生はみんなにわかってもらいたかったのです。

問四　先生の言葉を受けて、「ほめてもらったり、ほうびをもらったりするためにだけやるようなことは、ぐれつだっていうんでしょ」（53～55行行め）とロクが言います。つまり、おくった相手からのほめ言葉やほうびといった**「見返り」を求めないおくりもの**が、「いちばんたいせつなおくりもの」ですね。

問五　「先生がいつもしつっこくいってることだもん」（59行め）とロクに言われて、先生ははずかしそうな表情をしたと考えられます。「赤くなった」という表現がふさわしいですね。

問六　デッコと先生の言葉に注目しましょう。デッコは、「でも、いくら心をこめたものだからって、これはひどすぎます」（62・63行め）と言っているので、デッコにとっては**「へたでみっともない絵」**です。それに対し、先生は「じょうずじゃないわ。でも、ほら、いっしょうけんめいにかいてあるわ」（70・71行め）と反論します。先生は**「いっしょうけんめいかいた絵」**であるという評価を

していますね。

問七　先生は、「いっしょうけんめいにかいてある」（70・71行め）ことだけが、「いつでも、どんなときでも、いちばんたいせつで、りっぱなこと」（71・72行め）だとみんなにうったえます。たとえ結果がうまくいかなくても、他人が変だと思っても、いっしょうけんめいに取り組んだのであれば、そのことによってじゅうぶん価値があるのです。**ものごとの価値は、自分がどう取り組んだかによって決まるのだから、どんなことでもいっしょうけんめい取り組んでほしい**という作者の願いが、先生の言葉にこめられていると考えられます。

問一　それは、き

問二　例　自分はとてもきれいに作ったのに、みっともない表紙の歌集があたったから。

問三　A　だれのものになるかわからない
B　心をこめて作った

問四　イ

問五　赤

問六　①デッコ　エ　②先生　イ

問七　イ

第14回 物語・小説(6)

主題③

（出典　安藤美紀夫「草原のみなし子」〈理論社〉より）

［50ページ］

問一　「グビ」「ガーラ」について書かれている部分に注目しましょう。「グビやガーラから教えられた食物を見つけるのが～」（4・5行め）から、「グビとガーラ」はグルスに食物を教えていたことがわかります。また「ガーラは、家族でいっしょに食物を食べる時、よく、グルスにそう言ってきかせた」（18・19行め）、「いつもは口の重いグビも、かならずひと言、言いそえた」（24・25行め）とあるように「ガーラ」「グビ」「グルス」の三羽で食事をしている時のことを「**家族**でいっしょに食物を食べる時」（18行め）と表現しています。

問二　グルスはなぜ、そんなにも「むちゅうになって」水草を食べていたのでしょうか。「おなかも、すっかりぺこぺこでした」（3行め）が、その理由ですね。

問三　むちゅうでセリを食べているとき、どんなことを思いだすよゆうがなかったのかを考えましょう。直前までには、「グビ」や「ガーラ」が食事中に注意しなければならないことを、「グルス」に説明しています。食事中は「いちばん楽しい時」だけれども「いちばん危険なとき」（16・17行め）であると「ガーラ」が言うと、「まず、不意をつかれないようにするということが、いちばん大切」（22・23行め）と「グビ」が言っています。**えさを食べているときは、敵がいないかしっかり警戒しなければならないという教え**ですね。しかし、むちゅうでえさを食べていたグルスは、そうした教えを思いだすことができなかったのです。

問四　Ⅰ…キツネがグルスをねらっている場面です。「沼のうしろの森」に、静かにひそんでいる様子を表す言葉が入ります。2…「うしろの森から」「キツネがひととびした（ジャンプした）」ときの様子です。3…グルスをつかまえられなかったキツネが「グルスをにらみつけながら」「森へひきあげていった」場面です。残念そうな様子を表す言葉があてはまります。

問五　「……」の直前の内容をよく読みましょう。「もし、あの時、グルスの逃げるのが、ひとあしおそかったら」どうなっていたのか、また、「もし、あの時、キツネが、クロツグミに気づかれずに、もう一瞬早くジャンプしていたら」どうなっていたかを考えましょう。逃げるのがおそかったり、キツネが早く動きだしたりしていれば、

グルスはキツネにつかまっていたはずですね。

問六　「何とおれいを言っていいのかわからない」とは、どんな言葉を使っても言い足りないくらいに感謝しているという意味です。

問七　設問には「グルスが教えられた『もっと大切なこと』」とあります。グルスは、何を教えられたような気がしたのでしょうか。「この広い自然には、まったく思いがけないところに、おそろしい敵もいるかわりに、また、思いがけないところに、やさしい仲間もいるのだということを」（66～68行め）教えられたような気がしたのですね。「思いがけない」がくり返されていますが、二度書く必要はありませんね。

問八　今回の場面のグルスの行動を整理してみましょう。はじめは、えさをとるのに苦労していたため、おなかがぺこぺこになっていました。その後、むちゅうで食事をするのですが、あれほど注意されていたのに、周囲に気を配ることを忘れてしまいます。キツネにねらわれていることにも気づかず、あやうく食べられてしまうところでしたが、クロツグミのおかげでなんとか助かりました。**こうしたグルスの危なっかしい行動は、自然の中で生きていくための経験不足によるものです。**

問九　物語の中で、グルスはキツネに食べられてしまいそうなところを、親切なクロツグミに助けられ「おそろしい敵」と「やさしい仲間」がいることを学んでいます。このことを、もしも**人間の世界におきかえて考えてみると**どうなるでしょうか。人間が「食べられてしまう」ことは、あまり考えられませんね。むしろ、人間にとっての「敵」とは、**生きていく上でのさまざまな苦労や困難**のことだと考えられます。そうした困難が、思いがけず自分の身にふりかかってきたとしても、今回のグルスが助けられたように、**自分を助けてくれる仲間がいるはずだ**というメッセージが伝わってきます。

問一　イ　　**問二**　ウ
問三　A　危険なとき　　B　不意
問四　1　ア　　2　エ　　3　イ
問五　例　食べられていた　　**問六**　イ
問七　例　自然には、思いがけないところに敵もいるかわりに、やさしい仲間もいるということ。
問八　ウ　　**問九**　ア